遠野物語拾遺 retold

京極夏彦 natsuhiko kyogoku
×
柳田國男 kunio yanagita

遠野物語拾遺 retold

retold 序

この物語は柳田國男先生が昭和十年に刊行された書物遠野物語增補版に收錄されてゐる遠野物語拾遺を書き改めたるもの也。遠野物語增補版は明治四十三年に著された書物遠野物語に遠野物語拾遺を加へたる書物也。遠野物語拾遺は遠野物語に洩れたる譚ばかりを集め纏めたるもので、話者は佐々木喜善先生、刪定には鈴木棠三先生が携はれてゐる。この旧く遠き物語を前著同様一言一句減らすことなきやう努め、時に補ひ、時に順を違へて書き改めたり。適ふならば遠野物語と併せての一読を乞ふものである。願はくはこれを語りて再び平地人を戰慄せしめよ。

京極夏彦

遠野物語拾遺 retold

目録

Contents

序……005

朔月（ついたち）……009

三日月（みかづき）……023

宵月（よいづき）……055

十三夜（じゅうさんや）……095

待宵月（まつよいづき）……129

望月（もちづき）……151

覚書……181

十六夜（いざよい）……187
立待月（たちまちづき）……219
居待月（いまちづき）……263
臥待月（ふしまちづき）……297
更待月（ふけまちづき）……319
有明月（ありあけのつき）……355
晦日（みそか）……411

●文頭に記されている番号は、原典に付されている番号（掲載順）である。
●地名の表記や読み方が実際とは異なる場合もあるが原典に準拠している。

遠野物語拾遺 retold

朔月（ついたち）

百五十四

人の強い想いが凝って出歩くことを遠野辺りではオマクと呼ぶ。

生者でも、死者でも変わりはない。強く想えばそれは形となる。遠方にいても病床にあっても、幻となって人前に現れるのである。

土淵村の似田貝福松氏が東京の近衛連隊に入営していた時、同年兵に同じ土淵村出身の仁太郎という者がいた。この男は変わった男で、逆立ちに凝っていた。逆立ちが得意だったのだろう。何処でも、すぐに逆立ちをするのだった。

ある年の夏。

六時の起床ラッパが鳴るとすぐ、目を醒ました仁太郎は起き抜けに台木まで走って行き、例の如く逆立ちをした。ところが何の弾みか台木から真っ逆さまに落ちて、そのまま気絶してしまった。仁太郎は午後三時過ぎまで前後不覚であったという。

後に、その仁太郎が語ったところに拠れば、逆立ち中に躰の均衡が崩れ、妙な具合に逆転したという記憶だけはあるが、その後のことは能くわからないそうである。

ただ。

仁太郎は平素から暇があれば故郷の遠野に帰りたいと思っていた。転倒した瞬間にも郷里に帰ろうと願ったのだという。すると——。

落下したその瞬間、仁太郎は営内を駆け出していたらしい。ただ気ばかり焦って足が先に進まない。二歩三歩を一跳びにし、十歩二十歩分を跳躍して走ったが、それでもまだもどかしい。いっそ飛んで行こうと仁太郎は思った。

そして仁太郎は、飛んだ。

地上から五尺くらいの高さを飛び、翔て、仁太郎は村に帰ったのだという。途中の景色などは覚えていないそうだが、村に入ってからの景色は目に入って来た。

丁度午上がりだったらしく、仁太郎の家の前の小川で妻と嫂が並んで脛を出し、足を洗っているのを見掛けた。仁太郎は家に飛び入り、常居の炉の横座に座った。

母親が長煙管で煙草を喫い乍ら、笑顔を作って仁太郎を見守っている。しかし、おかえりとも、どうしたのとも言われない。折角帰宅したというのに、何の持て成しもない。

——これは、やはり兵営に帰った方が良いか。

仁太郎はそう感じたので、再び家を飛び出して、宙を翔て東京の兵営まで戻り、自分の班室に駆け込んだ——かと思った時。

薬剤の匂いが鼻を衝き、仁太郎は目覚めた。

見れば軍医やら看護卒、同僚の者達が大勢で仁太郎を取り巻き、挙ってその顔を覗き込んでいる。しかも、しっかりしろ、気が付いたかなどと言っている。

それが、午後三時くらいのことであった。

その後、一週間ばかりで仁太郎は本復した。しかし、気絶している間に奥州の実家まで往復した——気がしてならない。どうにも気に懸かる。これはもしやオマクではないかと思った仁太郎は、その時のことをこと細かに書簡に認め、実家に送った。

すると、その手紙と行き違いに、家からも手紙が届いた。

その手紙には、この間の昼過ぎ、妻と嫂が川戸で足を洗っているところに、白い服を着た仁太郎が飛ぶようにしてやって来て、家に飛び込んだと書いてあった。その時母親は常居の炉で煙草を喫んでいたのだが、白服の仁太郎が駆け込んで来て、横座に座ると忽ち見えなくなってしまったとも記してあった。

こんなことが起きるとは、徒ごとではない。家の者は何か変事が起きたのではないかと案じ、手紙を寄越したのであった。

日露戦争の頃の話である。

百五十三

日露戦争の当時、満州では不思議なことばかりがあったと謂う。
ロシアの俘虜が言うには、黒い軍服の日本兵は射てば斃れるが、白い軍服の日本兵は幾ら射っても斃れないのだそうである。
だが。
その頃、白い軍服を着た日本兵などは、いない。
土淵村の似田貝氏はそう語った。

百六十

オマクは身近に起きることであって、特別なことではない。

佐々木喜善君が幼少の頃。

土淵村の光岸寺という寺が火災に遭って焼け落ちた。

そこで寺を建て直すことになり、土淵村字山口に住む、慶次郎という大工が棟梁となって、新築工事が始まった。

ある日。

午休みの時間。四、五十人からの大工が休憩を取っていた。

そこに、十六、七の美しい娘が潜り戸を抜けて入って来た。

居合わせた大工達は一斉に娘を見た。それから娘が何処へ行ったのか、どういう訳か誰にもわからない。だが、入って来たところは全員がはっきりと見た。

頭の慶次郎は、

「今のは俺の家の隣の、小松の家の娘だ。ずっと傷寒の病で苦しんでいるから、こんな処に来られる訳がない。それではとうとう死ぬのか」

と言った。
娘は翌日死んだ。
その場に居合わせた大工の一人、古屋敷徳平（ふるやしきとくへい）という人の話である。
古屋敷氏もその娘の姿を見ている。

百六十一

土淵村役場に勤めている菊池某は、青笹村生まれの農業技師である。

先年の夏、菊池氏が仕事で盛岡の農事試験場に行っていた時のこと。

その日は暑かったという。

じっとしているのも大儀に思える程に室温が高いので、とても家の中にはいられないということになり、菊池氏は友人と共に北上川縁まで夕涼みに出た。

川端に腰を掛け、川風を浴びつつ友人と話し込んでいた菊池氏は、何の気もなしにふと川の方を見た。

幻が見えた。

川の流れの上に故郷の家の台所の有り様がはっきりと現れていたのである。

驚いて茫然と見ていると、そこに菊池氏の姉が子供を抱いている後ろ姿が在り在りと映った。

幻である。

幻はやがて薄れて、消えた。

あまりの不思議に菊池氏は家に変事があったのではないかと考え、手紙を書いた。
投函すると入れ違いに電報が届き、菊池氏は姉の子供が死んだことを知った。

百四十九

遠野の某村の村長は、元々青笹村の生まれで、若い頃は青笹村役場で書記を務めた人である。

その頃、春の清潔法の執行のため、役場の者は巡査と共に、幾日もかけて各集落を廻っていた。某もその役に就いていたのだそうである。その最中（さなか）のこと。

某はある夜、夢を見た。

村の者が数名で葦毛（あしげ）の馬を担いで来る。斃（たお）れた死馬を運んでいるのである。

翌朝目を醒ました某は、妙な夢を見たものだと思ったが、別段どうということもないので、いつも通り村廻りの仕事に出た。すると。

葦毛の死馬を担いだ人々に行き逢った。

場所も、陽射しの感じも、担いだ者達の衣服も何もかも、夢で見たのとそっくり同じであったと謂う。

あまりの不思議さに今でも時々その夢を思い出すのだと——これは村長本人が語ったことである。

百五十

昔、こんなことがあった。

江戸の頃だろう。ある侍が夢を見た。

物見山（ものみやま）を呑（の）み込んで腹中に収めてしまうという、荒唐無稽な夢であった。

高が夢ではあるが、どうも気に懸かった。そこで、大徳院（だいとくいん）で夢占いを引いてくるように下男に言い付けた。下男は急いで大徳院に向かったが、途中で顔見知りの侍に出逢い、呼び止められた。何処へ行くのかと問われた下男は、是々然々（これこれしかじか）と訳を話した。

するとその侍は、

「そいつは大変だなあ。物見山なんか呑んだりしたら、腹が裂けようぞ」

と言って、大いに笑った。

その後大徳院に行って子細を告げ、占いを頼むと、大徳院の僧は、

「その夢はもう誰かに判断されているから、当方では判じ兼ねる」

と言い、何も答えてくれなかったそうである。

夢を見た侍は、その後何らかの理由で切腹して死んだ。